

## かお・人インタビュー

2013年10月11日(金)

九州地方整備局北九州国道事務所

## 赤星文生所長 インタビュー



## ◎北九州国道事務所の管内印象について

私は平成17年度に勤務してから七年ぶり2回目の勤務となりますが、職場の環境は、事業展開が早いものの、職員数の減少と高い平均年齢(42歳)によって、職務分担の階層が大きく変化していると感じています。

また、地域の印象については、本州と九州を繋ぐ位置にあって、大きく北九州エリア(筑前)、筑豊エリア(筑豊)、京築エリア(豊前)

の3生活圏があり、西へ国道3号、東へ国道10号、東西に国道201号、南北に国道200号と歴史ある旧街道とともに、それぞれの沿線環境にも特徴があります。ひとつには旧産炭地域を広く抱えていること、そして様々なものづくり産業が多く、とりわけ自動車関連産業が広く分布しています。こうした産業活動を効率的に支える路線として地域からの期待が高く、一方で公共事業への要請も多種多様であり、事業執行は必ずしも容易

ではありません。

## ◎これまでの赴任地の思い出は

鹿児島国道事務所を皮切りに、主として鹿児島本線沿いを往復し、合間に東京生活3年、久留米市2年を含み、単身赴任も3回ほど経験しました。「井の中の蛙」を痛切に感じたのが霞が関の道路局時代で、有料道路関係を担当していましたが、国が地方公共団体の道路公社などに無利子で有料融資を行い、民間銀行の借入れなどとも合体化させながら、安いコストで道路財源を確保し、高速道路建設のスピードアップを図り、確実に整備していく。直轄事業とは異なる非常に合理的な事業運営であり、いろいろな建設手法があることも知り、大変勉強になりました。まさに“カルチャーショック”で、楽しみながら貴重な体験をさせていただき、この3年間は私の意識と知識を変えましたね。

また、平成22年から23年度にかけての久留米時代は、久留米市の都市建設部長として出向。歴史が深い、名所、旧跡も多く、伝統文化、観光産業などが盛んな街で、九州新幹線の久留米駅などを中心とした市街地の「まちづくり」

に携わりました。久留米を全国に知ってもらうために、いろいろな仕掛けをしましたが、市街地では通りの何番目にどのような名所、旧跡があり、お店の紹介も兼ねた“道しるべ”を作成して、観光客などにも情報提供し、さらに、日本の原風景としてのフルーツ街道の田主丸地区、酒蔵群のある城島地区、ツバキ、ツツジなどの原生林を守り育てて、国土交通省の「日本風景街道」にノミネートし、登録も実現しました。このように蓄積した諸々が「まちづくり」の隅々に開花・結実した2年間だったと思います。

## ◎25年度事業概要と目玉事業

当事務所は筑豊、京築、遠賀、北九州地区の県北部を管内に抱き、国道2、3、10、200、201号の5路線約183kmを管理している。

予算面では、昨年度の補正予算約70億円により、改築では国道201号行橋インター関連事業等の前倒しに相当する予算によって、供用公約が確実となっています。

一方、維持管理及び修繕では、橋梁補強・修繕等の推進が大幅にスピードアップできました。今年度は約80億円で、主に供用必要額が充当され、昨年度補正を合わせて通常年度の約2倍の予算を執行中であります。

今年度の目玉事業は、東九州道・行橋インターと合わせて国道201号バイパス『行橋インター関連』約4.3Km、暫定2車線の開通となります。加えて暫定2車線で全線(約9.7Km)が供用している国道201号飯塚庄内

田川バイパスで、一部区間の完成供用が予定されています。この事業は西側から拡幅を順次進めており、今年度は堀池交差点から東へ1.1Kmが4車線で完成します。これでこの事業の

4車化率は約37%に達します。主たる残事業は烏尾トンネルの二期線となっています。

その他、国道3号黒崎バイパス、国道10号豊前拡幅、国道201号香春拡幅、国道322号八丁峠道路(直轄代行)はじめ3箇所の電線地中化事業及び4箇所の交差点改良事業を進めています。

## ◎情報化施工について

管内の改築工事6件に対し、普及に努めている段階である。国道201号バイパス工事を主に、モーターグレーダー技術やトータルステーションによる出来高管理技術に活用している。

## ◎入札契約関係について

(1) 今後の総合評価落札方式について

現在の総合評価落札方式は、幾多の試行を重ね、現在は二極化いわゆる施工能力評価型(I, II)と技術提案型(S, A)の区分により進められています。事務所は分任官工事として前者のうちII型が大半です。応札希望社の企業能力や配置技術者の能力等に基づいて、価格に対する技術評価点(評価値)



により決定されます。

最近、管内で国が発注する工事の参加資格は有するものの、工事実績評価に関する改善要望が幾つかあります。県や市町村における同種・類似実績があり、地域の実情に長けている地場企業の受注機会への期待であります。地場企業の技術力向上に関する取組はかなり進んできてはいるものの、技術者及び企業の能力に関する評価ではないかと思えます。

こうした要請内容は新聞情報の範囲ではありますが、中央でも、特に緊急時に対応できる体制を持った企業評価への議論が進んでいます。その中で、地場企業が地域を支える枠組みづくりへの動きも見えつつあります。今後、建設業の担い手不足の課題も視野に入れつつ、地域や事業特性に応じた評価が組み込まれることを期待しています。

(2) 若手技術者の育成について

多くの建設業の方々から聞く話だと、従業員の年齢層は40歳から50歳代が中軸を占めており、最近では発注件数の激減も引き金と

なり新規入職者を得られなくなり、まさに中長期的な担い手不足に陥る環境にあると言います。さらに、ベテランが退職する時代が迫るにつれ、技術の伝承並びに品質確保の問題も露呈しつつあります。

今後は、老朽化する公共インフラに対し、次世代に多くの負荷をかけないインフラ・メンテナンス技術への積極的な取組が求められます。その意味で、学生時代から若い年齢層への広報・啓発活動が益々重要視されものと考えます。

その基本に「何のために」、「誰のために」行う事業なのか、その目的（機能）達成への最適解は何かを見いだせるアプローチが若手技術者に生きがいと誇りを与えると信じて止みません。

### ◎出先事務所の長としての抱負について

『道路を安全に安心して使って頂く』これが我々に課せられたミッション。そのもと、最も大事なのが職場の連帯感の醸成。職員の一体感が得られないと平時も緊急時もその機動力を発揮できないばかりか、地域の期待にも応えられない。

そうした意識に立ち、事務所のイントラネットに「北国ボード」と言う掲示板がある。この目的は、職員全てがこの掲示板により多くの情報を共有できること、かつ事務所長が職員へ適宜メッセージや業務の進め方など多くの関連資料を提供することで、職場の『見える化』を施しています。

その中で、就任当初から職員に伝えているのが、①第三のコミュニティへの取組と、②“みかん”と「サンマ」そして③“ノリ”を

もったのり・・・であります。①は名刺の世界や家庭環境で自己形成を図るのではなく、出先で接する様々な世界観をもって「思いこみ」から「思いやり」へのコミュニティ意識を持つこと、②は3つの感（感性を鋭く、感覚に長け、感動を得る）すなわち「みかん」を磨き、三つの間（人間関係、時間管理、空間の配置）旨いサンマを味わうこと、③は業務が円滑に進むには意欲や意識付けを高めリズム（ノリ）を持ってあたり、地域住民のニーズに叶った「糊しろ」になることです。

### ◎趣味や夢などは

余暇の使い方は常に「自己実現」

を目指すこと。ソロデビュー40周年を迎える高橋真梨子さんのファンクラブで、年1回のコンサートは欠かしたことがないという。

「あの年齢であの声量、感動ですよ」。マラソンも好きで、年1回は鹿児島県の“なのはなマラソン大会”に出場しており、今年は北九州市制50周年記念のマラソン大会への出場も決まっている。すべてのことを忘れて、庭で草花や野菜育てるガーデニングの趣味もあり、「今年の夏は特に厳しかった」。退職後は新婚旅行で行った信州地方に最愛の奥さんと行く新婚旅行の“再現が夢”と語る。



### ※プロフィール

昭和29年4月29日生まれの59歳。大分県大分市出身、国立大分工業高等専門学校を昭和50年に卒業して入省。得意分野は地域交通計画、都市計画、景観計画で、建設部門の技術士、一級土木施工管理技士、ビオトープ計画管理士等の資格を取得。九州観光のマイスターでもある。平成19年7月に九州地方整備局道路部地域道路調整官、平成22年4月に久留米市の都市建設部長などを経て、平成24年4月から現北九州国道事務所長に就任している。